



北原白秋論 : 近代の詩と国語 (二〇二三年度修士論文要旨)

川上, 優芽

(Citation)

國文論叢別冊, 2:19-20

(Issue Date)

2024-09-30

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100491574>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100491574>



北原白秋論 —— 近代の詩と国語 ——

川上 優芽

本修士論文では、『思ひ出』から『満洲地圖』までの北原白秋の詩を、非——〈国語／標準語〉的なものとの距離から検討する。近代日本における〈国語〉の問題は、一九九〇年代以降、イ・ヨンスクや安田敏朗、長志珠絵らによって提起されてきた。本論はその問題意識を共有しながら、〈国語〉と詩語との関係が詩作品に与えた影響を、白秋を中心として考察するものである。

第一章では、折口信夫が「詩語としての日本語」の中で翻訳詩体の中に「第二国語」たる詩語の可能性を認めたことをふまえ、白秋の故郷柳河を追憶した第二詩集『思ひ出』（一九一一）に見られるローマ字表記「柳河語」が果たした役割を検討する。

『思ひ出』は詩の主体を認識の不明瞭な「無智」の位置に置くことで主体自身を異和として故郷から疎外し、詩語が日常化されざる空白として呈示される。しかし当時、詩語の空白化は解決すべき問題であった。薄田泣重『白羊宮』（一九〇六）の合評を繙くと、翻訳語としての古語がもはや辞書を引かなければ理解できないほど空白化していた事情が見えてくる。白秋は、詩の内部において空白であった「柳河語」に辞書体の註釈を付すことで「わが生ひたち」という仮構された故郷へと詩語を還元し、空白の限界に抗った。ローマ字表記語への辞書の註釈は翻訳を思わせるが、詩の外部で「柳河語」を翻訳する過程は、それが詩の内部において翻訳

不可能であったことを逆説的に明らかにしている。『思ひ出』の詩語は、その翻訳不可能な固有性によって詩語たりえたのだ。

第二章では、一九一〇年代に制作された未刊の三崎詩集『煙の祭』（『白秋詩集』第一巻、一九二〇収録）から、白鳥省吾との間に交わされた一九二二年の論争を経て「ちやつきり節」（一九二七）に至るまでの白秋の民謡観の変遷について考察を加える。

一九〇〇年代の民謡蒐集は〈標準語〉制定を目的とする〈方言〉調査の一環として始められ、志田義秀や雑誌『百合合』も国語改良という枠組みを継承し、民謡の方言を保存していた。しかし上田敏は国語改良の枠をあえて排することで室楽と民謡の接続を図った。敏の影響下にあった白秋の『煙の祭』には、〈方言〉と〈標準語〉の葛藤が見られる。また民謡の引用・コラージュが地方の固有性を蔽い隠すなど、詩集では地方性と普遍性が拮抗している。

創作した民謡に「郷土」がないという白鳥の指摘に白秋は柳河民謡で応えたが、白鳥の「印刷」という言葉を受ける中で白秋の民謡論は均衡を失い、普遍性へと傾いていく。白鳥の一九一〇年代にも平明さと「知的階級語」の拮抗があった。一九二二年の論争は葛藤する一九一〇年代の実作を理論化するものであった。一九二七年になり、白秋は過去の民謡の過剰な普遍性を反省する。しかし方言を多用した「ちやつきり節」はあらかじめ替唄が防止された一元的なものであり、普遍性への傾斜は不可逆であった。

補論では、『有明集』以後の蒲原有明が一九二〇年代に発表した語源説的なテキスト（以下〈名称考〉）一群を取り上げる。従来語源説として読まれ、看過されていた〈名称考〉は、有明にとって「詩の正道」に据えるべき試みであった。語源説は、ナシヨナリズ

ムに支えられながら、地理・歴史の中心に〈日本語／国語〉を繰り返し位置づけ、それを特権化せんとした。有明のほかにも与謝野寛や佐藤惣之助がそれぞれの仕方でも語源説に接近している。

《名称考》は木村鷹太郎著『世界的研究に基づける日本太古史』（一九二一）を参照し、指示対象と結びつかない音韻的聯想を志向したが、実際のテキストは音韻に先立つ記述によって展開されている。また、初期は語源説のナシヨナリズムを脱しておらず、指示対象との距離も一定ではないため、木村の模倣に過ぎない。『日光』に分載された後期《名称考》は、語が語自体に回帰する閉鎖性と、言語間の遠近を欠いた平面的な記述による語源説的ナシヨナリズムの解体を特徴とする。木村の方法をデフォルメすること、《名称考》は語自体が空転するような詩法へと到達した。

第三章では、一九二五年の北海道・樺太旅行に取材し、アイヌ語を多用した「老いしアイヌの歌」（『日光』、一九二六・二↓『海豹と雲』一九二九）について論じる。詩中のアイヌ語は、ほとんどがジョン・パチエラー『アイヌ人とその説話』（一九二五訳）からの引用である。白秋が詩に引入れたアイヌ語は、ローマ字で音写されたものを仮名文字へと逐字変換したものであった。重訳されたアイヌ語は、身体のない文字だけが前提されている。

掲載雑誌『日光』には民俗学的性格があった。白秋もまた『古風里謡鈔』で原始的なものへの廻行を説いている。白秋は「老いしアイヌの歌」を折口信夫が「日本文学の発生」として据えた「祝詞等」の一つとする。しかし本来、成立の異なるアイヌの神話を、「日本古神道」として廻することはできない。詩人は書くことによってアイヌから声を奪い、それを可能にしたのだ。

白秋はトルストイの戯曲の題と同じ「生ける屍」という言葉でアイヌを喩えたが、これは、当時アイヌの風貌をトルストイになぞらえる言説をふまえたステレオタイプである。書くことで、見る／見られるの関係さえ奪われたのだ。

第四章では、『満洲地圖』（一九四二）を考察する。白秋は満洲鉄道の招聘に応じ、一九三〇年に満洲を旅行した。この詩集は二年の年月を経て作品化されたものである。

車窓からの景色を常に「ここ」として描く視点は、大和田建樹『地理教育 鉄道唱歌』（一九〇〇）の旅行体と一致している。当時の地理教育は大陸を一眸する視点で記述され、高村光太郎ら同時代の詩人もそれに倣った。白秋は「ここ」を移動する主体を描くが、『満洲地圖』の満洲はまた郷愁の対象でもある。これは一九〇五年の唱歌「戦友」に歌われた「ここ」であり「とほい」満洲の延長にある。遠近の二重性は方向感覚を喪失させ、他者の言葉をオノマトベへと逃亡させる。他言語と緊張関係を持たない詩語のありかたは、当時の《国語》の垂直性に相即するものであった。

満蒙旅行当時の散文を自己参照した詩が複数ある。現下の満洲が描かれないうことで、その後の交通の膨張が不可視なものとなり、詩は国境侵犯の欲望をかきたてる。過去の満洲はさらに日露戦争の史跡として描かれ、満洲固有の歴史がたどられることもない。一九〇四年から一九三〇年までに固定された『満洲地圖』の史観の中で、主体は日露戦争の意味を現在に還元しえないまま、不明瞭な「何か」にのみ直面する。虚構された日本語の「地位」を肯定することにより、詩語は他者なき絶対性に安住してしまうのだ。

（かわかみ ゆめ）